

# 日本語時代の台湾文学

—短歌結社「新泉」と宇野覚太郎—

頼 行 宏

台湾の国語が日本語であった1895～1945年に台湾歌壇の揺籃としては嚆矢とされる「新泉」<sup>1)</sup>について、従来、雑誌自体が現存しないためともに論じられてきませんでした。ここで傍証資料を通して「新泉」を見てみましょう。

台湾短歌結社の先駆け「新泉」は島田謹二<sup>2)</sup>の研究によれば、「万葉の古調を宗として雄渾豪逸なしらべを重んじた」とされる宇野覚太郎(=秋皐)ですが、

この秋皐の一門は「新泉会」を結んで、短歌雑誌「新泉」を発行し、明治三十八年四月以降八(?)冊を出して三十九年一月廃刊となつたが、毎号秋皐が万葉集評釈を巻頭に掲げて新人を誘導したと伝えられる。

といます。また、黄得時(等編)「台湾に於ける文学書目」<sup>3)</sup>の解題によれば、

明治三十八年創刊。台日文芸記者宇野覚太郎が中心となり、万葉古今の融合調を主としたる和歌雑誌。六号にて廃刊せりと云ふも、未見。

といます。台日の記事「第八号限り廃刊」(1906年3月28日)を見れば、島田の説明のほうに信がおけます。ただ「「新泉」第一号出づ」(台日1905年4月7日)、「新泉第八号」(台日1906年2月13日)にしたがえば、「新泉」の8号存続期間が1905年4月6日～1906年2月11日となります。

秋皐の出自ですが、鈴木虎雄の1903年作「祝宇野秋皐大人偶逢令妹歌并に反

歌」に「加賀ひとの宇野あきたかか、たかさごの島にさすらひ」<sup>4)</sup>と詠じられて  
いることから、石川県出身の秋臯が台湾にやってきたことが分かります。

その間に、台日に入って、台日の紙面に於いて秋臯が「謡曲文と日本文学」  
(1902年6月11日～7月12日)と「閩路」(1903年11月25～12月23日)を連載しま  
した。一方、秋臯は1900年7月8日～1903年4月3日まで「いかづち会」の選者と  
して活躍していました。そもそも「いかづち会」は1898年～1903年まで東京の  
久保猪之吉を中心とする新派短歌の創作研究会だから、秋臯が台湾の共鳴者と  
して「いかづち会」をリードしたものと思われる。

「新泉」以前の秋臯は、台日文芸欄「いかづち会」の選者でした。「新泉」の  
発足記事が1905年3月15日に披露されました。それを見れば、

歌学研究を目的とする小団体は従来とても到る処に成立したりしも弘く知る  
知らぬ人の集れる会合といふものは曾て無かりしが斯道の熱心家山本天笑氏  
は有志者の勸に従ひ自ら奮起斡旋の勞を取りて一昨夜館内の如雪庵に於て其  
相談会を開きたり

とある如く、台湾領有十年以来、非公開の歌会が随所に存在していたことが分  
かります。この結束を固めるべく一旗揚げたいと考えた愛好者達は、山本天笑  
を發起人の代表に推しました。これに続けて趣意書には、

旧派といはず新派といはず(略)まづ会を命名して『新泉会』と称すること  
とし柴田小壺、山崎楽天山本天笑の三氏を幹事に選み次に申合規則を仮定  
し来る十九日(第三日曜日)午後一時より淡水館に於て第一回を開くこと、  
し『寄梅恋』『冬堂』を宿題として散会したり

として、如何なる流派も拒まない方針を打ち出し、既に歌友を糾合する開放的  
な雰囲気を作り出していました。同じ淡水館(次頁:写真<sup>5)</sup>)でも、漢詩題を

決めて児玉源太郎総督が会長として台湾の進士・挙人・秀才などを招待した「揚文会」（1900年）が先鞭を付けていました。趣意書の最後に、「新泉」の規約が次のように掲出されています：



一会日 毎月一回第二日曜日午後一時より同じ六時まで

一会場 書院街淡水館 一会費 一人金十銭

一研究方法 自宅にあつては得たる歌を纏めて毎週土曜日までに台日社山本天笑宛送付して某氏の選評を請ひ会場にあつては席上二題を課し一を即吟として或は互選し或は某氏に選評を請ひ一つを宿題となす又時々某氏に囑して歌書の講義若くは歌がたりを聴く

一雜則 如何なる初学者にても入会を諾す▲所謂旧派新派を問はず▲一切の申込は台日社山本天笑宛

ここで名を伏せた「某氏」は宇野秋臯（1905年3月19日）に決まったわけです。秋臯は選歌にあたるとともに『万葉集』講義を行ない、「和歌八病」「難解の語句」「仮字のつかひ」<sup>6)</sup>「枕詞」などを説きました。

「新泉」の発行間隔としては、1号（1905年4月頃）、2号（同5月5日）、3号（同6月頃）、4号（同8月頃）、5号（同9月頃）、7号（同12月頃）、8号（1906年2月）が台日記事によって確認でき、最初は月刊の計画でしたが6号あたりからは遅刊がひどくなってきたわけです。原因として考えられるのは、第7回例会（1905年9月12日）で起った論争でしょう。

後端なく美辞学上の所謂語彩に就て大討論起りたる結果残念ながら席上即詠を見合はし会規を多少修正して今後和歌は勿論新体詩韻文美文等研究範囲を

拡張することに決し散会したり

即ち、修辞法に関わる議論があって、爾後ジャンルを追加する合意に達したのでしょう。しかし、拡大方針の翌月、「従来毎月一回宛例会を催せしも今後は一年四回開催の事に定め」（1905年10月10日）として会則を季会へと変更しました。会員間の交流頻度が低く落ちたなかで、「新泉」は解散することになったのでしょう。

昨年三月多大の趣味と抱負とを以て起れる歌会新泉会は目下全島を通じて百余名の会員を有せるにも拘らず会費の未納月を追て嵩み歌稿の投寄も絶無となり最早継続の見込みなき為め今回幹事協議の上断然会を解散し雑誌『新泉』を<sup>ママ(二)</sup>一月発行の第八号限り廃刊することに決し（1906年3月28日）

といます。毎週土曜日から月例会、季会へとぐるぐるの変わり純短歌から離れて、求心力を緩ませていった結果です。

「新泉」の頁数が32（2号）、6（4号）、8（5号）であり、歌数が300余首（2号）、400首（3号）、88首（5号）と伝えられます。台湾色の濃い「屯山春曙」「竜眼肉」「沽西瓜」という新題だけは知られています。

秋阜の作は我々の目にはあまり多く触れませんが、秋阜『竹風蘭雨集』<sup>7)</sup>と吉川利一『高砂歌集』<sup>8)</sup>には数首だけ収められています。たとえば「過檳榔樹林」の一首「我心檳榔の樹のごと直くあらば世の事ゆ糸に物はもはじを」は、両歌集ともに録されています。また、「天長節」（1902年11月3日）の長短歌は

八隅しゝ、我大君の、あれましゝ、けふの吉き日を、  
ふとしかす、都のうちも、八汐路の、鳥根のほかも、  
のきことに、旗をしたてゝ、いへことに、酒をしくみて、  
久かたの、あめとこしへに、荒かねの、つち久しきを、

足引の、山は樵歌に、勇魚取、海は漁笛に、  
人草の、おいもわかきも、玉葛、かけてことほき、  
空翔ける、雲井の田鶴も、落穂はむ、くろの雀も、  
あからひく、朝日の影に、もろこゑに、千代こそ呼はへ。  
刺竹の、君のめくみの、したつゆを、みかにたゝえて、  
菊の酒を、み旗の下に、くみかはし、千代をいはゝむ、  
われらもいさや。

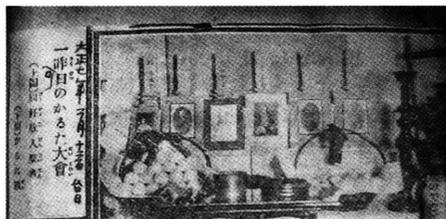
### 短歌

大君の、めくみの露に、みかにたゝえ、くみて祝はむ、けふの吉き日を。

枕詞（八隅しゝ、久方の、粗かねの、足引の、勇魚取、玉葛、赤からひく、刺竹の）を多く詠み入れながら、対句（都内・島外、軒旗・家酒、天・地、山は樵歌・海は漁笛、老・若、雲居の鶴・畔の雀）を多用する万葉調といえます。

台日の南部付録編輯長に転任した（1909年11月18日）のち、秋臯は新派旧派の作品を台日紙上で選歌しました。旧派なら、台湾鶯蛙会の導師とされる竹下種長と長井永太郎<sup>9)</sup>が投稿しました。例えば長井永太郎の「送宇野秋臯之台南」には「南さす車のごとくたのみてし君に別れて路ぞ迷へる」（台日1909年12月5日）があります。新派なら、アララギ系の藤井烏榎・加納小郭家が投稿しました。藤井烏榎の栲会においても秋臯が「万葉通」と仰がれて『万葉集』講義をなされた（台日1910年4月12日）といえます。新派旧派を問わず秋臯は依然として台湾歌壇を指導したわけです。

そのかたわら、秋臯は「台湾百人一首かるた」の発展に尽力したようです。というのは、1918年2月13日の台日には、右の写真が掲出されま



した。その説明によると、「かるた同好故人祭典」としかありませんが、岡野才太郎『台湾かるた会の記録』<sup>10)</sup>を参看すれば、1918年2月10日、台北倶楽部で台

北かるた大会開会に先立ち、当会の恩人故宇野覚太郎などの為に祭壇を設けて冥福を祈ったとあります。「十五年の久しき間本島文壇の重鎮として貢献する所多かりし秋臯宇野覚太郎氏が病気の為め上京中遂に不帰の客となりし」<sup>11)</sup>といわれる秋臯は逝去するまで和歌の娯楽を普及させる為に寄与したことを確認できるわけです。

最後に、台湾人の出詠について考察しておきます。秋臯が主導した「いかづち会吟集」には、台湾人の参加した実例として台日1902年8月15日の「台湾雑詠」（課題）に、蘇嶽「土匪一人蕃刀を横へ生首を提げて夕月淋しき森をゆらりゆらり行く」があります。これについて、

歌は必ずしも三十一文字に限るべきにもあらねどもこの歌の如きは「韻文」の範囲を脱して稍「散文」に近づかんとするものといふべし

と評されています。また秋臯はこれを次のように作り直せば意が尽きるとしています。

生首をさけて蕃刀を横へて夕月の森を土匪ゆらりゆらり

「新泉」に台湾人が参加したか否か定かではありませんが、蘇嶽はかなり早い段階における台湾人の初期詠作者として注目すべきでしょう。

#### 〔注〕

- 1) 孤蓬万里『「台湾万葉集」物語』（45頁、岩波書店、1994年）
- 2) 「山おくの桜ばな—山田義三郎の歌—」（128頁、「台大文学」1939年9月）
- 3) 「愛書」65頁、1941年5月
- 4) あけび歌会（編）『葯房主人歌草』（77頁、東京：アミコ出版社、1956年）
- 5) 石川源一郎（編）『台湾名所写真帖』（頁数なし、台北：石川源一郎、1899年）
- 6) 宇野秋臯『俗語と難辞』（171～181頁、浅岡書籍店、1899年）には「仮字のつかひ」があります。例えば「ゐ若くはひに紛るゝもの」として「おい 老」などが挙げられています。
- 7) 館森鴻・宇野秋臯（編著）『竹風蘭雨集』（19頁、台北：不明、1907年）

- 8) 下23頁ウ、台北：吉川利一、1924年
- 9) 島田謹二「岩谷莫哀の瘴癘」（110頁、「台湾時報」1939年10月）
- 10) 切抜き帳（未刊行）、1989年
- 11) 作者不詳「宇野秋臯氏追悼会」（台日1914年2月26日）

#### \* 討議要旨

坪井秀人氏は、①発表者自身は、台湾短歌史の中で宇野覚太郎あるいは「新泉」をどう評価するのか、②最後に紹介した蘇嶽の短歌をどのように解釈するのか、と尋ね、発表者は、①評価は時代によって変化するものであるから私自身の評価を提示するのは避け、史実の報告のみに徹したい。②あえて解釈するならば、この短歌は武力抗争の続く当時の社会情勢を踏まえたものである。「土匪一人」とは政府に反旗を翻す人間であり、原住民の武器を略奪し、その首首を討ち取って夕月淋しい森の中をゆらりゆらり行くという意味である、と答えた。

堀まどか氏は、短歌は国家と密接に結びついてゆくとする先行研究もあるようだが、蘇嶽を秋臯が指導したように、昭和以降も、結社の台湾人によって作られた短歌を日本人が推敲したり評価したりする例は見られるのか、と尋ね、発表者は、最初は日本人の指導下で歌を詠むのが主であったが、後に台湾人自らが短歌欄を含む雑誌を創刊するようになってゆく、と答えた。それに対しさらに堀氏は、そのような台湾人による雑誌には、日本に対する抵抗を題材としている歌が掲載されているか、と質問した。発表者は、台湾総督府による武官統治時代には武器や戦いについて詠んだものが多かったが、文官統治時代へ移行するとそのような題材は減少し、季節感や寂寥感などが出てくる。そして再び武官総督時代に入ると、天皇に忠誠を誓うような題材が出現する、と変遷を述べた。

栗田香子氏は、タイトルを「日本語時代の台湾文学」としているが、「植民地文学」ではなく「台湾文学」とした意図があれば教えてほしいとし、発表者は、私見では現在の台湾は北京語時代であり、ひと昔前は日本語時代であったと考えている。「台湾文学」の定義については諸説あるが、本発表では、台湾で設立した結社や発刊された雑誌を中心に取扱ったため、タイトルに冠した、と答えた。